

## 受賞者の業績



さとう みきこ氏 41歳(保健婦・宮城県)

昭和44年の赴任以来、妊婦貧血、乳児死亡、低体重児の率が高い三本木町の状況を改善して母性意識の向上を図るため、数々の普及啓蒙活動を企画。これが住民の自発的な受診や相談を促進する結果をもたらし、高い評価を受けている。

現在も地域ぐるみの母子保健活動の充実を図るための組織づくりに注力、担い手となる母子愛育会や地区ヘルスリーダーなどの育成にも活躍が期待されている。



すずき たみこ氏 55歳(保健婦・茨城県)

竜ヶ崎保健所から水戸へ転勤し、母子保健事業の基礎づくりに参加。母子保健の知識の普及に成果をあげ、遠隔地、農村での健康管理、相談事業を手がける一方、乳幼児の心身に関する研究にも取り組んだ。

8年前に、マザーケアセンターを設立し、産休明けから学齢までと幅広く母子保健相談事業を進め、また保育園を経営、地域の母親の相談相手として得がたい存在となっている。



いでのぶこ氏 52歳(保健婦・千葉県)

大都市圏への交通至便な都市のため、近年、特に若年層の流入が目立ち、出生率も県下第1位である浦安市に赴任して10年。

この間、核家族の中で孤独に悩みを抱えた多くの妊産婦を面接相談活動で保護を行うほか、健全な母親の育成を目指した教育を主眼に母親学級、親子教室の開催など、地域の特性と住民のニーズに適應する行動力に、周囲の評価は高い。



いしづか よしこ 石塚 淑子氏 53歳(保健婦・新潟県)

長年にわたる保健婦および看護婦養成所教員経験を踏まえ、昭和51年から県内初の量販店内における母子相談事業を担当している。

量販店内という状況のなかで、当初は多少の問題もあったが、店側との密接な情報交換で違和感を減らし、育児に不安をもつ母親への適切で心のこもったアドバイスの成果は、相談者の定着度に顕著で、根気よく問題解決の方向づけをし、内外で信頼されている。



しまだ じゅんこ 嶋田 潤子氏 38歳(保健婦・富山県)

富山県は従来から、先天異常による乳児死亡が高率のため、県の母子保健対策の重要課題となっている。

そのなかでの遺伝相談事業に対する熱意に、専門家の信頼は厚い。講師などとしても活躍している。

また、赴任地ごとの問題の特性を的確にとらえ、タイムリーな保健指導など問題の早期解決のための数々の企画はさん新で、管外からの参加者があるほど。将来が大いに期待されている。



なかざわ あきこ 中澤 昭子氏 39歳(保健婦・山梨県)

分譲地造成、医大誘致により人口が急増する玉穂町で、地域に根ざした住民主体の母子保健活動を精力的に展開している。

従来の普及活動に加え、婚前学級、妊娠の早期届出の指導などを保健活動のなかで長期・短期の目標を定めて計画実行するほか、愛育組織を育成し、健康まつりを毎年行って健康を皆で考える機会をつくるなど、成果をあげている。



うすい えいこ 臼井 英子氏 54歳(保健婦・静岡県)

小山町は人口の移動の激しい土地であるが、30余年の間、全戸の新生児・産婦訪問を継続中。また健診の充実を図るためにも、未受診者への電話連絡や、夜間、休日を問わない自宅での相談受け付けなど、その一途な仕事ぶりは、職業を越える功労である。

地域ぐるみの母子保健の催しにも熱心で、特産品を利用した歯科衛生指導は、地元でも好評である。

---



木村 紋子氏 55歳(助産婦・滋賀県)

自宅分娩の介助を主に、助産婦活動を続けた後、自宅分娩が急速に減少のきざしが見えたため、昭和36年に助産所を開業。地元医師との密接な連絡が、母体を死亡させたことがないという実績をあげている。

入院中の妊産婦に睡眠、食事、運動に関して積極的な指導を行う一方、新生児訪問指導、低体重児指導、ハイリスク妊婦の訪問指導を手がけるなど幅広く活躍。地元への貢献度は高い。



足立 登代子氏 54歳(保健婦・兵庫県)

柏原保健所在職中、乳児の健康相談、集団健診等を行ううち、先天性股関節脱臼も、早期の発見で治療期間は短縮され全治も可能となることを、専門医師の協力により立証し、発表。これが評価され、昭和45年から全県で先股脱臼検診実施を実現させた功績は大きい。

また愛育班育成活動にも積極的で、母性保護意識の向上、異常の早期発見に努めるほか、後進の指導にも余念がない。



田 染 竹 代氏 50歳(主婦・推進員・和歌山県)

美山村は、山間のへき地で、交通の不便さと、慣習や迷信にとらわれた古い考えが推進員活動の障害だったが、巡回訪問と普及活動を根気強く地道に努めてきた。住民の母性意識の向上のために果たしてきた長年の功績は非常に尊い。

過疎化の問題も深刻化し、推進員への相談内容も多岐にわたるが、同僚の相談役を果たすかたわら、研修会にも積極的に参加するなど、研鑽に励んでいる。



鷹 取 弘 子氏 55歳(保健婦・岡山県)

32年間、岡山県内の愛育委員会組織づくりに力を注ぎ、委員らの総力をあげた訪問指導により、各地で乳幼児健診の受診率の上昇、日本脳炎などによる乳幼児死亡や人工妊娠中絶の減少に大きな成果をあげた。

また母親グループ、乳幼児クラブ、勤労婦人学級などを発足させて、住民相互の話し合いの場を提供し、住民自身による母子保健活動を促進している。



さ えき ひさ え 氏 36歳(保健婦・愛媛県)

丹原町に就職以来、管内住民の健康管理把握のために全住民の世帯台帳を作成するほか、段階を細分化した乳幼児健診で適切な母子管理を実践中。

従来の集団教室に加え、実態調査結果を用いた母乳推進運動、地元の産物を材料にした離乳食教室等、実証に基づいた、また地元 に即した母子保健指導は説得力があり、職務に対し、ひたむきに尽力している。



もと もり よし はる 氏 54歳(産婦人科医師・高知県)

産婦人科医師がおらず医療施設からも不便であった檮原町の要請を受け、県立病院に勤務するかたわら、昭和46年から休日を利用して妊婦の定期健診を継続中。妊婦、乳幼児の異常の早期発見治療に効を奏し、住民の安心感を増し、周産期死亡率などが激減した。

その後、訪問の対象が拡大されるにつれ、地域で行われる各種の健全母性育成活動の指導者として、重要な役割も果たしている。



よし た ま つ 子 氏 36歳(保健婦・大分県)

かねてから武蔵町は乳児死亡率が高かったため、母子保健推進員制度を発足させ、名称を愛育班とした。

全町で1つだった愛育班も、組織の拡大強化を期待して3つの地域に分割し、愛育班だよりの発行、声かけ運動、家庭訪問の充実、健康相談日の設定などの活動によって、昭和56年には乳児死亡率は0となった。健康で明るい町づくりを目指して、これからも活躍が期待されている。



あさ くら ひろ こ 氏 51歳(保健婦・北九州市)

北九州市の保健所で21年間にわたり、婚前教室、妊婦・乳幼児の健診などを精力的に行ってきた。身体・精神・運動発達・栄養面で一貫した母子保健管理体制をつくり、障害児の早期発見、早期治療に努め、さらに、健全な家庭づくりを目指して積極的に活動を続けている。

今後は中高校生の健全育成を目指し、性教育、禁煙教育など幅広い活躍が期待されている。

---